

Weekly Market Report

Feb 01, 2021

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

リスクオフのドル買いが優勢。FOMCは予想通り現状維持の結果に。

USD/JPY (1週間の値動き)



(出所) Bloomberg

コメント

先週のドル円相場は、2か月半ぶりの高値を示現する上昇相場となった。週初は特に新たな材料はなく、FOMCを控えてポジション調整の展開となり103円台後半でもみ合いに膠着。FOMCでは、政策金利を現行のゼロ近辺に据え置くと同時に、量的緩和も現行水準維持を決定するなど、事前予想通りの結果となり市場への影響は限定的となった。資産購入ペース縮小に関してはまだ時期尚早と否定しており、今まで通り慎重姿勢を強調した。週央にかけては、米株安・米債利回りの低下等からリスクオフのドル買いが強まり 104円台乗せ。その後もドル買いが継続され週高値104.93円を示現するも105円台は届かず、104円台後半での越週。今週は、米ISM製造業景気指数や米雇用統計など主要な経済指標の発表が連日予定されているため、現状のドル相場への影響に警戒が必要である。(市場商品部/菊池)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
2/2(火)	(米国) ISM製造業景気指数	60.0
2/3(水)	(米国) ADP雇用者数	5.0万人
2/3(水)	(米国) ISM非製造業景気指数	56.7
2/4(木)	(欧州) BOE政策発表	
2/5(金)	(米国) 非農業部門雇用者数変化 / 失業率	5.0万人 / 8.9%

USD/JPY (5年間)



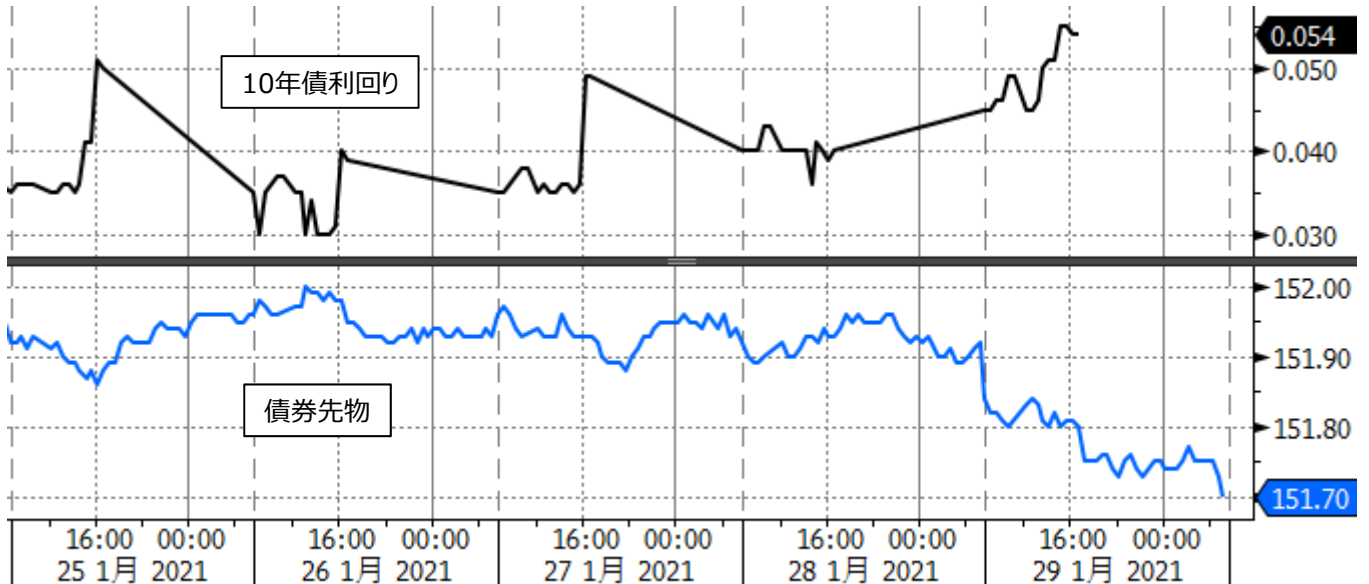
今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
山下航平	103.00 - 105.50	重要な経済指標 (ISM製造業景気指数、米雇用統計等) が多く、都度結果に注目。ドル円は従前通り底堅い展開か。
福永純一	103.50 - 105.50	米株式市場の調整地合いが引き続き継続し、リスクオフのドル買いがドル円下値を支える展開。米主要経済指標に注目。

2. 円金利相場概況

「1月日銀会合の主な意見」において長期金利レンジ拡大やYCC弾力化が改めて意識され金利上昇

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）

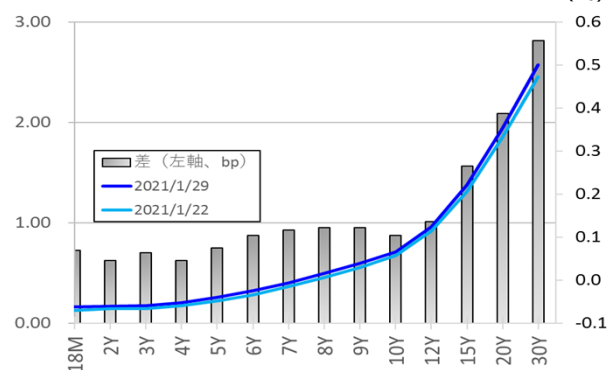


(出所) Bloomberg

コメント

先週の円債市場は週前半、FOMC政策発表を控え値動きに乏しく、週央にかけて米10年債が1%割れまで買われる場面でも円金利は3月の日銀による政策点検に対する警戒感から金利低下は限定的。FOMCでは政策を現状維持、パウエル議長の会見では事前の報道と同じく早期のテーパリングについて否定され市場予想通りの結果。FOMCを通過した米金利は週末にかけてはスティーブ化し、円債もそれに伴って金利上昇。金曜は1月日銀会合の主な意見や2月日銀オペスケジュールが公表されたが、主な意見では長期金利のレンジ拡大やYCC弾力化が日銀点検の主要議題の1つであることを確認し、日銀オペでは中短期ゾーンの買入が500億ずつ減額され、円債市場は売り優勢で一週間の取引を終えた。今週は10年超の金利がこもとのレンジ上限まで上昇しているため10年と30年の入札は無難に消化すると考える。一方で、3月の日銀点検を前に警戒感が高まる可能性があり金利は下がりづらい展開を想定する。(市場商品部/権田)

金利スワップ変化（1週間）



5年円金利スワップ推移（5年間）



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
内田直樹	0.02% - 0.06%	3月の日銀点検に向け、円金利はレンジ上限近傍での神経質な展開が続く見込み。2/2の10年債入札結果には注目。
伊豆浦有里恵	0.03% - 0.06%	長期金利の変動幅拡大や資産買入の柔軟化等、3月に向けた政策点検への警戒感の高まりから金利上昇余地を模索する展開。

3. 今週のトピックス

当面の英ポンド相場見通し

ハードブレグジットは回避できたものの、当面の英ポンド相場は上値が重くなる展開か

<当面の英ポンド相場見通し>

英ポンドの対ドル相場については、2020年3月の新型コロナショック時にプラザ合意以来の安値水準である1.14台まで急落したものの、その後はドル売りトレンドが継続する中、合意なきEU離脱が避けられたこともあり、堅調な推移が続いている。ただし、英国における新型コロナウイルスの感染拡大やロックダウンの長期化、またブレグジット後の英国経済への懸念からイングランド銀行（BOE）は今後も強い緩和姿勢を示してくるとみられ、今後のポンドドル相場は上値が重くなる展開を予想。チャートの際には過去のサポートレベルである1.4000がレジスタンスとなりそうだ【図表1】。当面のポンドドルのレンジは1.3200-1.4000、ポンド円は138.00-145.00円。

<英国の経済状況>

2020年末に英国がEUとの通商協定に合意したことでハードブレグジットは避けられたものの、国境での税関審査の再開による輸入コストの上昇や、EU向けに金融サービスを提供するため英国から本拠地を移転する動きも多くみられ、英国経済にとって厳しい状況は続いている。財政赤字と経常赤字が続いていることもポンド売り材料となってくる。

英国の経済見通しについてBOEは2020年の実質GDP成長率-11%、2021年見通し+7%程度としているが、新型コロナウイルスの感染拡大やブレグジット後の混乱もあって1月の総合PMI（購買者景気指数）は急落しており、今週2/4の金融政策会合では成長率見通しが下方修正される可能性が高い。また、インフレについてもBOEは2021年末までに目標水準の2%に到達する見込みとしているが、2020年12月のCPIは前年比+0.6%にとどまっております【図表2】、目標にはほど遠い状況となっている。

金融政策面では、2020年11月の政策会合でBOEは政策金利を0.1%に据え置いたものの資産購入枠を1500億ポンド引き上げて8950億ポンドとし量的緩和を拡大した。BOEは今のところマイナス金利導入に対して慎重な姿勢を見せているが、景気の悪化に配慮して今後マイナス金利の導入に踏み込む可能性は否定できず、英国2年国債金利もマイナス圏での推移となっている【図表3】。BOEの強い緩和姿勢はポンドドル相場の上値抑制要因となってきそうだ。

<英国発の地政学リスク>

英国がEUから離脱したことで地政学リスクへの懸念も高まっている。アイルランドと北アイルランドの国境紛争が再燃する可能性や、5月に予定されているスコットランド議会選挙の結果次第ではスコットランドが再び独立の動きを強める可能性もあり、ポンド相場の下落材料として警戒していく必要がある。

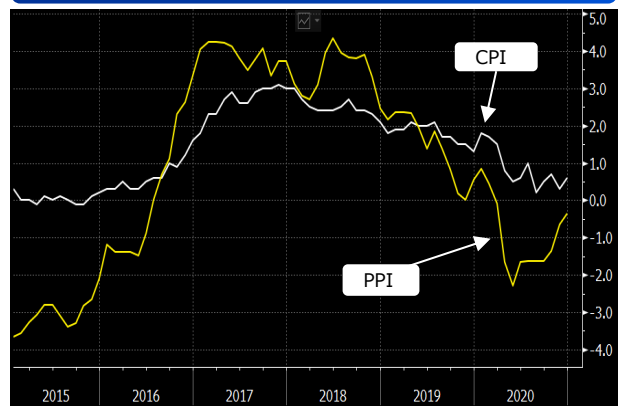
（チーフ・マーケット・ストラテジスト／諸我 晃）

【図表1】 英ポンドドル相場の推移（1985年-）



（出所:Bloomberg）

【図表2】 英国のCPIとPPI（前年比）



（出所:Bloomberg）

【図表3】 英国の政策金利と2年国債金利



（出所:Bloomberg）

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会